



大晦日や元日に恒例のコンサート等が無観客で行われるなど、例年と異なる年末年始でした。明けましておめでとうございます。一陽来復となりますように願っています。

観察すれば見えてくる 土器から学んだこと 小中学生社会科見学

中村家住宅において、昨年10月末～12月の間に4校の社会科見学がありました。市立東中学校支援学級、西方小学校5年生、新方小学校3年生、草加市立栄小学校3年生の皆さんです。新型ウィルス流行中でもあり、できるだけ開放された場所で、マスク着用はもちろん、手指消毒をして密接にならないような工夫をして参加していただきました。今回も小中学生の瑞々しい感性を見せてくれました。その一端をご紹介します。

!! どうして土器の内側が黒いの??

右の写真をご覧ください。炉や竈^{かまど}で煮炊きに使用された土器の外側下部に煤がついて黒くなることはよくありますが、これは土器の内側を黒くしています。

この土器は“内黒土器”と呼ばれる土師器^{はじき}です。土師器は野焼きで焼成されたので窯で焼かれた土器よりももろくて地肌が粗く、液体が浸みこみやすいのです。そこで炭素を吸着させて漏れを防ぎました。炭素吸着の方法はまだ判明していません。焼成後に土器に油を塗ってそれを燃やすとか、葉を入れて燃やすなどが考えられています。



古代の人々が意図的に内側をコーティングしたことを、児童たちは不思議そうな面持ちで聞いていました。

!! 底の渦巻き模様は何??

土器の底に渦巻き模様がついているものがあります。これも児童たちが「おやっ?!」と思った部分でした。これは“糸切り紋”(切り離し痕)と言います。ロクロを使って成形後、ロクロからはずす時に糸を

使って切り離すとこのような紋ができます。



古代人との対話

ここに紹介した土器は市内北西部、大袋地区の大道遺跡^{おおみち}で出土したものです。いずれも9世紀後半～10世紀初頭(平安時代前期)の人が作り、この地域の人々が用いていたものです。1000年以上も前に使われていた土器を実際に観て直接触れることは、時を超えて当時の人々や世の中に触れることです。それは古代人と対話するような感覚だったのではないのでしょうか。その一端を児童たちは体験しました。社会科見学を終えて列を作って旧東方村中村家住宅を後にする際にも、職員に内黒土器について質問をしている男子児童の姿がありました。

この土器が作られた頃の世の中はどのような状況だったのか、年表で見てください。

【平安時代前期の世の中】

世紀	市域の出来事	日本全体の動き	世界の動き
8	750年 大相模不動堂（大聖寺）建立	794年 平安京造営（京都が首都となる）	
9	861年 最澄の弟子・円仁が慈福寺（現・浄山寺）建てる。	空海、最澄が唐から帰国 各地に武士が発生	イスラム帝国栄える
10	おおみち 大道に村があった。 写真の内黒土器が使用されていた。	武士団が形成され始める 平将門・藤原純友の乱	唐が宋に、新羅が高麗となる。

都では華やかな貴族の生活があった頃、地方では自分が開発した土地に名前をつけて主張する動きが起きてきました。その中からは以前にはなかった階層、後の武士が生まれていった時代です。そのような時代の内黒土器です。

なぜ水が漏れないの？

社会科見学では内黒土器以外にも水が漏れない工夫を学ぶ機会があります。

(1) 茅葺屋根

旧東方村中村家住宅は従来茅葺屋根でした。茅（萱）はイネ科植物（葦（よしまたは「あし」、ススキなど）の総称です。茎や葉が細長いこの植物は、古来敷物や屋根、壁などに用いられてきました。市域では茅葺屋根はほとんど見られなくなり、当館も住宅地内にあることからやむを得ず金属葺きにして形を表しています。ジオラマ模型で往時の姿を見てもらうのですが、雨水が漏れないのかと児童たちは心配します。

そこで、本物の茅束を用いて実験をしたのが右の写真です。茅の表面は固く、油分が多くて光沢があります。たくさんの茅同士にはわずかな隙間があり、雨水は表面張力によってその隙間にまとわりつきます。屋根は現代住宅よりも傾斜が強いので、雨水は真下に浸透せずに軒先まで流れていきます。



(2) 桶

桶は丸太をくりぬいて作っていると思った人もいたようです。底がなぜ抜けないのか、合わせた板の間からなぜ水が漏れないのかという疑問を持った人もいました。構造を簡単に話したら、目が輝きました。



旧東方村中村家住宅のかつての茅葺屋根
(軒先を下から撮影)

